

郷土の海産動物 No. 14

伊 藤 十 治*

75. エボヤ Styela clava HERDMAN

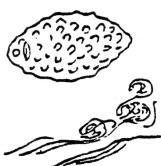
原索動物 Protochordata, ほや目 Ascidiacea, スチエラ科 Styelidae の一種。

昔、植物のヤドリギ(宿木・寄生木)= ヤドリギ科の一種。常緑灌木。広葉樹に寄生し、茎は叉状に枝分れしてその先端に細長いこい緑色の革質の二葉がある。雌雄異種。早春うす黄色の小さな単性花をつける。球形の緑黄色の果実をつける。ヨーロッパでは、果実のついた枝を Christmas の装飾に用いるという=のことをホヤ(保家?)と言ったそうだが、このヤドリギのように根をはって岩に着生するからというのが、通説〔『倭名類聚抄』(931~938年刊行20巻、日本最初の分類本で書かれた漢和辞典)〕; 『大言海』(1932~1937年刊行語源・出典に意を用いた国語辞典)〕であるが、今ひとつはっきりしないと西村三郎博士(1987)はいっている。

漢字ではホヤを現在〈海鞘〉と書くが、昔は〈老海鼠〉の文字をあてていた。海鼠(円筒状で柔らかい体をしている)はナマコのことで、ホヤはナマコ *Strichopus* (英名 sea-cucumbers)の老成したものと考えたらしい。ホヤ類を英語では sea-squirts (海中で液体を噴出する); ドイツ語では Seescheiden; フランス語では ascidies という。



エボヤ(時岡1979)



老海鼠 [和名は保夜]

〔と思うに、老海鼠〔『和名抄』*では魚類に入れているが、これを海鼠の老いたものとみなしているのであろうか⁽¹⁾〕は松前・津軽の海洋中により、網を引いてこれを取る。形は団く、大きなもので六、七寸、周り八、九寸。殻は淡赤く全体に膚が多くあって海鼠の胱のようである。頭・尾ともに同じようで、どちらが頭か尾か見分けにくい。少し裂けた口があり、口から縦に破って肉を取る。肉もまた淡赤色〔甘鹹、寒〕。香りは海鼠の匂いと似ていて、透頂香の気味がある。熬り酒で食べる。あるいは醬(生肉に麴を加えて塩漬にしたもの)にして他地方へ送る。〕

注1 『和名抄』では魚類に入れているが……『和名抄』では、卷十九、亀貝類二百三十八にある。

海鼠の項には崔禹錫の『食経』を引いて、「海鼠〔和名古本朝式加敷字、伊里古という〕蛭に似て大きなものである」とあり、老海鼠はそれにつづけて載せ、『漢語抄』を引き、「老海鼠〔保夜、俗に保夜の二字を用いる〕」とある。(和漢三才図会1712年より)

本科は鰓囊 branchial sac に4対の褶襞がある。

本種の類縁には次のような種類がある。

* 〒910 福井市高木町64-12 福井市中藤小学校

1. *Styela plicata* (LESUEUR) シロボヤ

黄白色で多くの小区域(表面が強い褶溝による)に分けられる。養殖筏に付着、世界の温水域に広く分布。日本の諸湾には普通

2. *S. partita* (STIMPSON) フタスジボヤ

黄かっ色～暗かっ色の横に長いだ球状で短い水管(入出水管)がある。熱帯の太平洋側(東京湾まで)に分布。

3. *S. clava* HERDMAN エボヤ(本種)(4) *S. symmetrica* TOKIOKA エボヤの変種5. *S. logipedata* TOKIOKA エボヤの近似種6. *S. rustica* 7. *S. barnharti* 8. *S. montereyensis* 9. *S. gibbsii*
など。

ホヤ類は、すべて海産で雌雄同体 monoecious または hermaphrodite で、幼生は一般的には尾をもったオタマジャクシ形の遊泳幼生である。

本種の体は細長く(約 7 cm)，体幹部が棍棒状でその後端が約 3 cm の柄部で岩や桟橋などに付着する。したがって、シロボヤと同じく汚損動物 fouling animals = 浮標・いかだ・船底などに付着して、いろいろな害を与える動物=の一種として本種は悪名が高い。しかし、場所によっては食用にすることもあるという。しかし、マボヤ *Halocynthia roretzi* (von DRASCHE) ほど食用としては有名ではない。朝鮮では乾燥して食用にするという。食用にする部分は、本種の筋膜体 fascia body である。

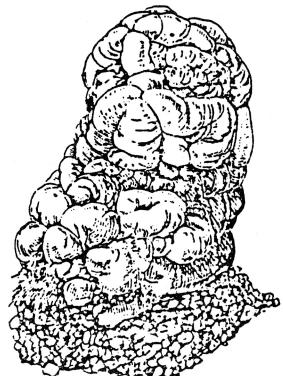
本種の外皮 pellicle または tegument はセルローズ cellulose 類似の物質(ツニシン tunicin = ホヤ繊維素=)からできている。そして、ちょうど革状でその表面に不規則な突起やしわがあって、柄部はたてじわがある。

入水管 oral siphon・出水管 atrial siphon は共に体幹部の前端に開くが、入水管はやや膜側にまがることが多い。食道 esophagus は短くて小さい。胃 stomach は前から後の方へ連なる。

本種は1年中生殖可能であるが、産卵最盛期は、6月下旬～8月中旬である。SUKEKAWA & HONMA(1977)によれば、佐渡ヶ島の両津港付近では本種の産卵期は5月～8月になるが、6月が最盛期であるという。本種の寿命は約2年と推定される。生殖腺の退化と個体の死は、産卵後すなわち7月以降であるという。卵の成熟およびその成長は、放卵直前に急速におこることが示唆されている。幼生のふ化がおこるまでの時間は、夏、約25℃の飼育で15時間かかるという報告がある。

本種は、日本各地・オホーツク海・朝鮮などの沿海に分布しているが、近頃、船底についてイギリス沿岸(イギリス南部～アイルランド沿岸)に浸入し繁殖をはじめているという報告がある。

本県では、敦賀湾などを始め、マカキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG) などの養殖いかだに付着しているからさがすとみつかる。

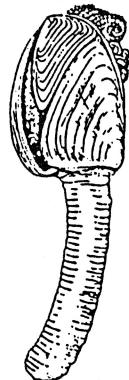


シロボヤ(時岡1979)

76. エボシガイ Lepas anatifera LINNAEUS

節足動物 Arthropoda, 甲殻綱 Crustacea, 蔓脚亞綱 Cirripedia, 完胸目 Thoracica, えぼしがい科 Lepadidae の一種

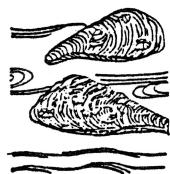
本種の和名は、頭胸甲の形が、昔、元服した男子がかぶったえぼし(鳥帽子)に似ているところから名づけられたという。そして、日本では堅い殻をもった水生動物を貝介(介は貝のあて字の意)と総称していたためもある。動物分類名辞典(1972)には、本種をツメガイともいうとある。和漢三才図会(1712)・平凡社(1987)には玉珧(えぼしがい、一鳥帽子貝;たいらぎー太似良木)とある。



エボシガイ(内海1979)

玉 瑲 (たいらぎ) 江 瑲 ばきょう 馬 甲

[俗に太似良木という。また鳥帽子ともいう。]

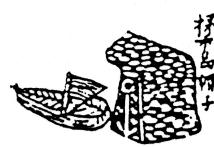


『本草綱目』(介部、蚌蛤類、海月)に次のようにいふ。玉珧は形は蚌に似て、長さ二、三寸、広さ五寸、上は大きく下小さい。肉は腥くかたくて食べられない。ただ長さ一寸ばかりで、玉か雪のように白い四つの肉柱は、鶏汁で濁して食べる。肥美である。火を通し過ごすと味が尽きてしなう、と。

△思ふに、玉珧は蚌の属である。黒色で波浪文様がある。上は闊く下は窄く長さは六、七寸、鳥帽子の形に似ていて、また馬甲のようでもある。それでこう名づける。腸は食べられない。一つの肉柱がある。玉のよう円く白いので玉珧といふ。大きなもので直径二寸ばかり、味は甘美で上饌にする。ただし『本草綱目』に四つの肉柱というのは誤りである。恐らく四柱の四の字は有とすべきであろう。(①その殻一片をとって華筭とする〔玉珧を一名海月といふのは間違いである。理由は左に述べる〕。

注1 恐らく四柱の四の字は有とすべきであろう「四肉柱」は「有肉柱」(肉柱がある)、とすべきであろう、という意味。(和漢三才図会1712年より)

えぼしとは、国語大辞典 小学館(1981)には、えぼうしの変化で鳥塗(クロヌリ)の帽子の意味で、元服した男子の用いた冠り物の一種である。また、紋所の名でもあるという。これらは本種の頭胸甲が鳥帽子形をした5枚の白い殻で包まれているからである。



鳥帽子
(『和漢三才図会』より)

いろいろな形のものがあったが、左右に扁平で、頂上前端がちょっと突きでているのが特徴である。
(西村 1987)

本種の類縁には、次のような種類がある。

1. Lepas hilli (LEACH) シラクビエボシ

エボシガイの近似種、エボシガイほど普通ではない。殻板が淡白色。

2. L. *anserifera* LINNAEUS カルエボシ

日本沿岸では普通種、エボシガイに比べ扁平で幅広く、頭状部の横断面は丸みがない。殻口の縁は橙紅色、柄部は紫かっ色で頭状部よりも短い。

3. L. *pectinata* SPENGLERE ルリエボシ

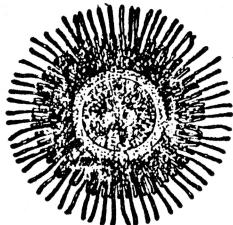
本属中の最小種。カルエボシの近似種であるり色をしている。ルリガイ *Violetta globosa* (SWAINSON)*や流れ藻などの軽い物体に付着する。

* ルリガイはあさがおがい科 Janthinidae の一種で、本科の英名を globe: sea snail という。日本沿岸では 5 種類ほどみられる。殻はうすい紫色で、世界中の暖流域に分布して、時には海岸に打ちあげられることがある。ルリガイの英名を Violet shell という。

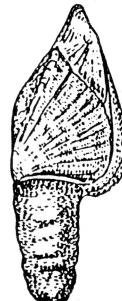
あさがおがい科は、雄性先熟 protandry 遊泳生活をする。足に浮のうをつくり、その下側に卵蓋 operculum を産みつける。カツオノエボシ *Physalia physalis* (LINNÉ); ギンカクラゲ *Porpita pacifica* LESSON などのクラゲ類 medusa を食べる。

カツオノエボシは、かつおのえぼし科 Physalidae の一種で、カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNAEUS) がカツオノエボシをかぶって南洋から参上し、日本にきてぬぎすてたエボシ(鳥帽子)であるとの俗信から和名がつけられたという。また熱帯水域に分布し、日本近海へ夏から秋の頃接近してくる。触手 digital tentacle にある刺胞 cnida, nematocyst の毒はきわめて強力である。

ギンカクラゲはぎんかくらげ科 Porpitidae の一種で、キチン質円盤のフロートで海面に浮び、その下面から多くのポリップ polyp を水中にのばし、飼(浮遊性の小動物・魚卵など)をあさる。



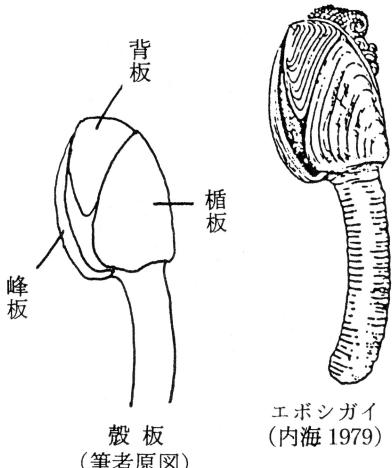
ギンカクラゲ(川村 1979)



カルエボシ(内海 1979)

カツオノエボシ
(川村・時岡 1979)

本種の体は、頭状部 capitulum と柄部 pedicel; peduncle; petiole とからなる。頭長が 3~5 cm で頭状部と柄部との比は個体によってまちまちである。頭状部は青白色の 5 枚の殻板 coronal plate でおおわれている。5 枚の殻板は 1 枚の峰板 carina; 1 対ずつの背板 dorsal plate; 1 対ずつの楯板 scutum とからできている。各板の縁は、橙紅色になっており、その間に膜状部は、黒~暗かっ色になっている。峰板は弓状になっており、下端の殻頂より叉状突起 tritosternum がでている。時には、楯板上には、微

殻板
(筆者原図)

細な放射線があることもある。右側の楯板内面には、頗著な殻頂歯 umbo tooth がある。楯板と背板の対角線上に暗緑かっ色の帶がみられることがある。背板は三角形をなしていて、口側縁の突出はいちじるしくない。殻の間から脚をくまでのように広げて水中の微生物をすくい取る。柄部の上部は、暗かっ色でその下部は、黄かっ色をしている。そして、柄部は伸縮自在である。

本種は、浮標・漁網・船底などに群れをなしてて浮遊生活をおくっている。また、クラゲ・カニ・魚・クジラなどに付着する。例えば、ヘイケガニ *Neodorippe japonica* (von SIEBOLD) の第3歩脚に、ムラサキハダカエボシ *Heteralepas quadrata* (AURIVILLIUS) が付着したり、ガザミ *Portunus trituberculatus* (Miers) の体表にスジエボシ *Conchoderma virgatum* (SPENGLER) が付着しているという報告がある。

本種は、全大洋に広く分布し日本沿岸では最も普通種である。

本県では、どこの海岸でもみられる。

77. エダフトオベリア *Obelia geniculata* (LINNE)

腔腸動物 Coelenterata, ひどろ虫綱 Hydrozoa,
軟水母目 Leptomedusae うみさかずきがや科(カン
パスラリア科) Companulariidae の一種。別名オベ
リアクラゲともいう。

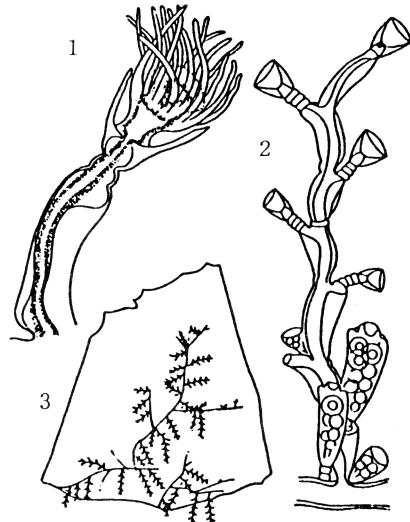
本種は一見植物みたいな(ヒドロ根 hydrorhiza で連絡
された多くの群体 colony) 腔腸動物の一種である。

本種のからだは、走根 stolon(地下茎状になった枝); rhizocaul を出して芝生状になっている。そして、からだは 約1.5cmの幹からなって、ほぼ規則的な節に分かれている。各節の囲皮 perisarc; periderm は、その一方側ではいちじるしく肥厚している。節の上端には、1個ずつヒドロ包(ヒドロ葵ともいう) hydrotheca がある。ヒドロ包は、コップ状をしてて幹上にはほぼ左右交互にある。口縁は、まるく平滑である。

ヒドロ包をつける柄の部分は、短く2~4個の環節 segment に分かれていてやや厚い。

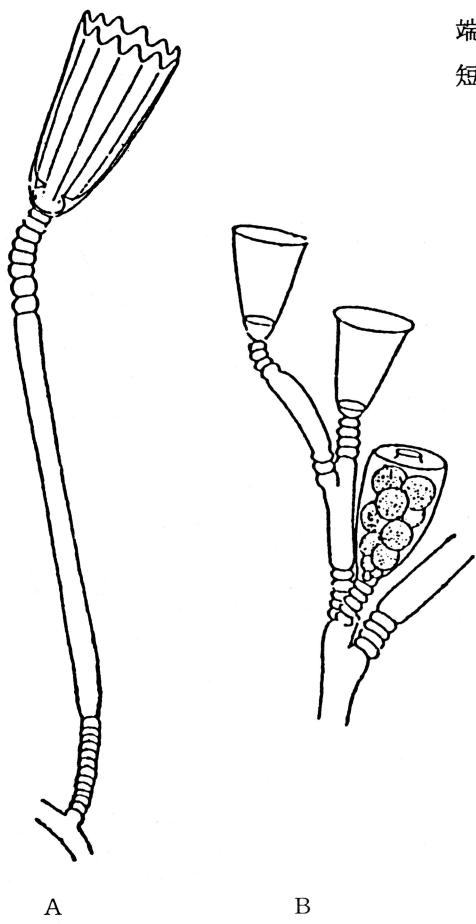
群体を構成するときには、群体全部を囲皮がおおうのであって、囲皮におおわれた共通の部分を共肉 coenosarc という。生殖腺は、通常 放射管の上に円形~だ円形をしている。

1つの幹に数個の生殖管 gonangium を茎の下端につける。生殖管は、深いつぼ状で側壁は平滑



1. 個虫 2. 群体の一部 3. 群体
エダフトオベリア
(篠原 1955)

でその上端は襟状になっている。また、その下端は次第に細まり、2～3個の環節に分かれた短い柄になっている。



カンパヌラリア科のヒドロ

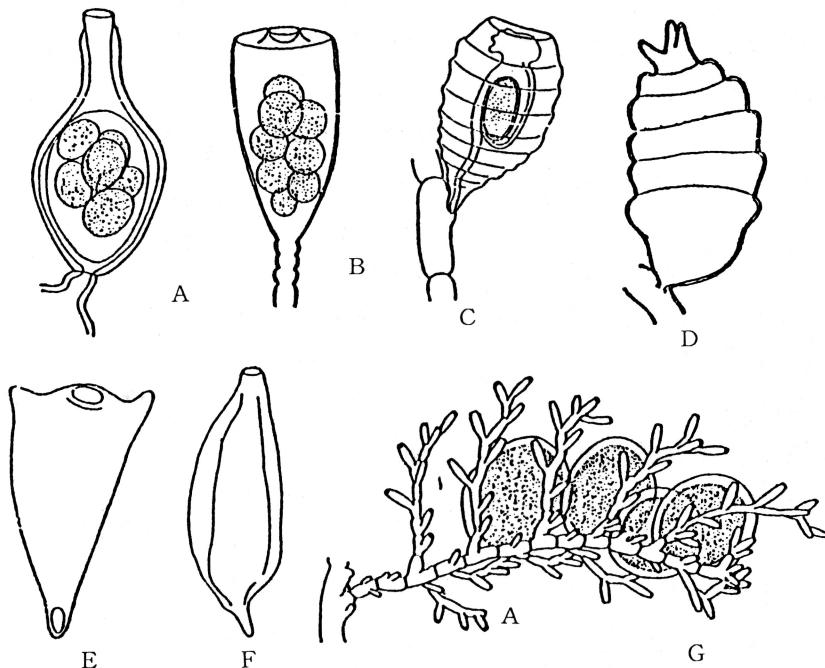
A. *Clytia linealis*B. *Obelia plana*

(岩佐正夫による)

本科には次のような種類がある。

1. *Orthopyxis caliculata* (HINCKS) アシナガコップガヤ 海藻類やその他に付着する。
O. *platicarpa* BALE ヒラタアシナガコップガヤ
スガモなどの海藻に付着する。日本海沿岸などはごく普通。
2. *Clytia edwardsi* (NUTTING) フサウミコップ 海藻類やその他に付着する。群体は小形。
C. *delicutula* THORNELY ヒメウミコップ 4つの触手をもっている水母をだす。
C. *linearis* THORNELY エダウミコップ
3. *Obelia geniculata* (LINNE) エダフトオベリア (本種)
O. *borealis* NUTTING フサオベリア
4. *Gastroblasta chengshanensis* LING ヤクチクラゲ 扁平で、だ円形のかさ形である。
5. *Campanularia groenlanidica* LEVINSEN タテスジウミサカズキ
C. *chinensis* MARKTANNER-TURNERETSHERR フサコップガヤ
C. *integra* ウミサカズキ

6. *Gonothyrea bicuspidata* (CLARKE) フタヘキザミ
 7. *Laomedea* など



有鞘類の生殖莢：

- A. *Campanularia*, B. *Obelia plana*, C. *Halecium magellanicum*,
 D. *Sertularella indiridisa*, E. *Sertularia robusta*, F. *Abietinaria coslata*, G. *Aglaophenia whiteleggei* のコルプラ

(総べて原図, 岩佐正夫による)

この科では、ヒドロ虫の触手が再生し体の一部分が再生するのみならず、体の一部分から全体が再生する可能性がある。ヒドロ芽を他のヒドロに移植すると、そのヒドロ芽が発芽して後脱落するが、脱落した部分に更に新しいヒドロ芽が生ずるように誘導される。この場合、ヒドロ花 hydranth で誘導されたものである。

本種は、かつ藻類・船底・浮き・岩かけに群体生活をする。幼生時代は、クラゲとなって泳ぐが、いまだ詳細なことはわかっていない。ただ、クラゲとなって泳ぐ仲間には、キセルカヤ科 Lafoeidae・本科・シリクラリア科 Silicularicidae などがある。肉食性の餌をあさる。汚損動物の一種でもあり発光動物の一種ともいわれる。

本種は、世界に広く分布し、本県では三国町安島沿岸などで採集されている。

78. オニナナフシ *Arcturus crassispinis* RICHARDSON 1909*

* H. RICHARDSON(1909): Pro. U. S. Natl. Mus. 37, 75.

節足動物 Arthropoda 甲殻綱 Crustacea 軟甲亜綱 Malacostraca**

等脚目 Isopoda おにななふし科 Arcturidae の一種。

** ギリシャ語の Malakos=やわらかいと Osrakon=殻・甲の意味

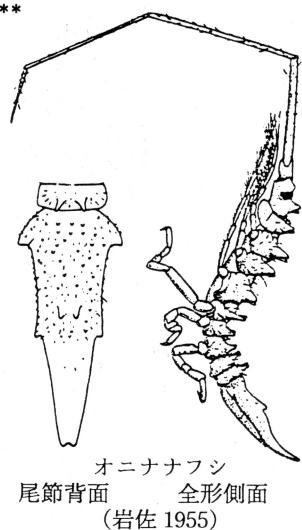
オニという語源はいろいろあるが、ここでは異形という意味である。ナナフシは、昆虫の直翅目 Orthoptera,(ナナフシ目 Phasmida)ナナフシ科 Bacunculidae の中に分類される。

ナナフシ(七節虫・竹節虫)は、体・肢も細長く全身が茶～緑色をなして、樹枝をゆっくり行動することから擬態 mimicry の例として有名である。

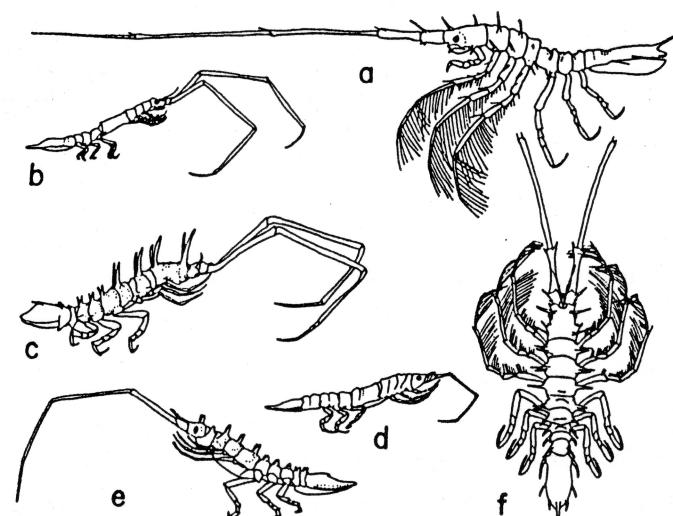
異形というのは、第一触角が短小に対し第二触角は、きわめて長い(第3～5柄節の伸長による)。また、体全体が背側にまがっていてとげが多くある。

オニナナフシ類を列記すると、GEORGE A. SCHULTZ(1975)*によれば次のようにある。

* G. A. SCHULTZ(1975): The Marine Isopod Crustaceans. U. S. A.



オニナナフシ
尾節背面 全形側面
(岩佐 1955)



Arcturus.

- a. *A. purpureus*. b. *A. glaber*. c. *A. longispinus*. d. *A. beringanus*.
e. *A. baffini*. f. *A. caribbaeus*.

		大きさ	分布範囲	水深
1. Arcturus	beringanus (BENEDICT)	11mm	ペーリング海・アラスカ	51～133m
2. A.	longispinus (BENEDICT)	35mm	アリューシャン列島	101 m
3. A.	glaber (BENEDICT)	31mm	ペーリング海・アラスカ	101 m

4.	Arcturus	baffini	(SABINE)	40mm	グリーンランド・北西カナダ	9~274m
5.	A.	caribbaeus	(RICHARDSON)		カリブ海・Near Aves島	1,249m
6.	A.	purpures	(BEDDARD)	18mm	西インド諸島・Sombrero島	813m
7.	A.	granulatus	RICHARDSON	40mm	北海道以北	320m 前後

本種の大きさは約40mmで体幅は8mm
(体が細長く円筒形) ぐらいである。体
色は暗かっ色~暗灰色である。体形を
模式化したのが右図である。

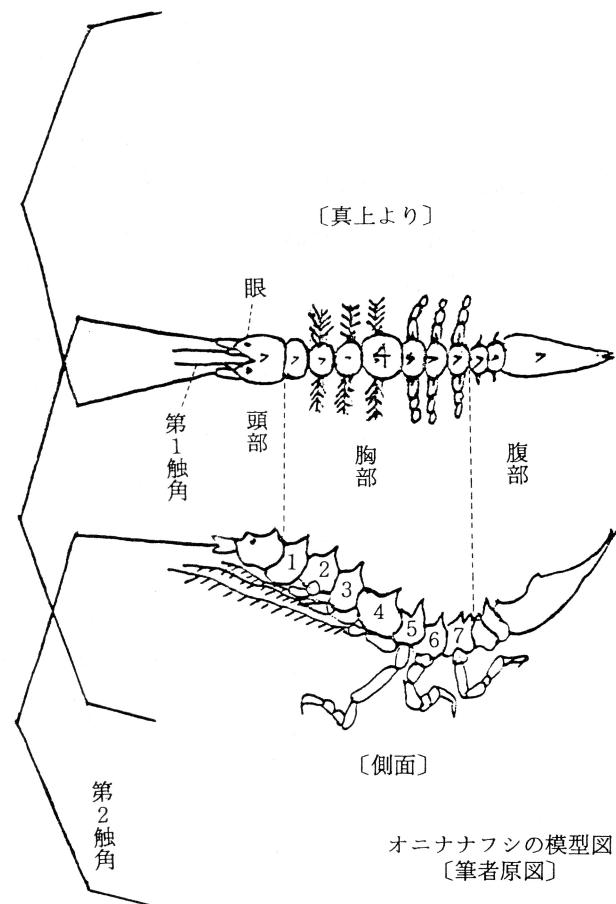
頭部の前縁は三角形に湾入している。
そして前側の隅は突出しその直後に眼
が1対ある。胸部の体節は7個よりなって、
第4胸節がとくに他節より長い。
三角形の側板は第2~第7胸節に1対
ずつある。腹部の体節は3個となる。
その前部2節は短く形態は胸節に似て
いる。第3腹節(体の後端体節=俗にい
う尾)は長く、体長の約1/3で長三角
形をなしている。ただ後部の最先端は
三角形に湾入している。

第1~第4胸肢は細長く、長い剛毛
を有して胸部腹面に沿って前方に向い
ている。第5~第7胸節には各々胸
肢が1対ずつあって、ややはさみ状で
長い剛毛がなく後方に向いている。こ
れらは一見、歩脚とみられる。

第1触角(小触角)antennuleは小さく、第2触角(触角)antennaは、非常に大きくて長い。これ
は触角の第3~第5柄節が長大で、鞭状部は短い。

体の各節の背面には1対ずつの円錐形の棘状突起がある。また、体の表面は顆粒や細かい毛でお
われれている。

本種は、水深70~250mの場所にすむ。朝鮮海峡・日本海・オーツク海などに分布している。
本県では、左右海岸沖で採集されている。



オニナナフシの模型図
〔筆者原図〕

79. オオワレカラ Caprella Kroyeri DE HAAN

節足動物 Arthropoda 甲殻綱 Crustacea 端脚目 Amphipoda ワレカラ亜目 Caprellidea (Laemodipoda) われから科 Caprellidae の一種。

『大言海』によると、ワレカラ(破殻)の義は乾くと体がこわれるという。元来、海藻の上に付着したばかりの幼い二枚貝 Bivalva やゴカイ類 Nereidae の棲管を意味すると西村三郎博士(1987)は言っている。これならば、乾燥すると海藻から離れ落ちてこわれることも実際ありうる。

ワレカラを英名では、体形から skeleton shrimps(やせこけたエビ)といい、独名で Gespenstkrebs という。昔から、歌にも読まれた動物である。本種の行動が、緩慢でしかも形が奇妙なので、歌の題材(我からに言いかけて詠まれる)にされたのであろう。例えば『古今和歌集(平安初期の最初の勅撰和歌集。延喜13年(913)の作)卷十五』に典侍藤原直子朝臣が歌っている。

あまの刈る藻に住む虫の われからと音(ネ)こそかなめ 世をば恨みじ

また『伊勢物語(平安時代の歌物語、作者不明)』にもある。

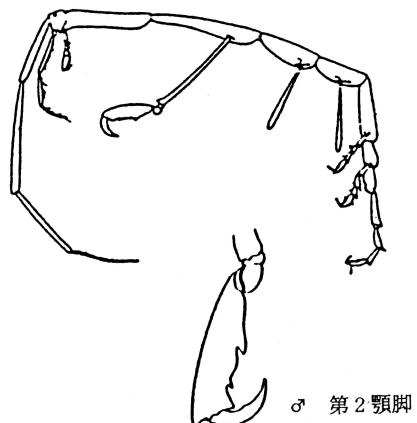
磯の藻類〔特にホンダワラ類 Sargassaceae……sargo はポルトガル語でぶどうの意味; ホンダワラの気泡がぶどうの果実に似ているからであろう。アマモ Zostera marina LINNÉ……ひるむしろ科 Potamogetonaceae の一種で、ギリシャ語の Zoster は帯という意味で、和名は甘藻の意味で食べられる。〕などに付着して生活する。体を屈伸して運動するようすは、尺取り虫〔シャクガ科 Geometridae の幼虫をいう。英名で inch-worms または measuring worms という。独名で Spannerraupen という。〕の動きに似ている。

本種は、本科の中で最も大きいからオオという頭文字をつけた和名となったのであろう。体色は、環境によっていろいろである。体は細長くて円筒状である。そして、体は頭部と 7 個の胸節とからなって腹部は退化している。体長は 10~40mm である。

本種の第 1 触角は、すこぶる長くて体長にはほぼ近い。第 2 触角は短くて細く、第 1 触角の長さの半分にも及ばない。第 1 ~ 第 2 頸脚 maxillula は、鎌状のはさみ形をしている。特に第 2 頸脚は非常に長くて大きい。このためにカマキリ Mantodea [英名で praying insect といい、約 1,600 種類ある。] に似ているという。頭部は、背棘 dorsal spine ではなく、胸部 thorax も平滑である。

本種の胸部は、第 2 胸節が最も長く、第 1 胸節の大きさはその 3/4 である。また、第 3 ~ 第 4 胸節の大きさは約 1/2 である。第 3 ~ 第 4 胸節には、細い葉状の鰓 gill があって脚はない。そして鰓のつけ根附近に前方に向いた鋭い棘が 1 対ずつある。

本属には次のような種類がある。

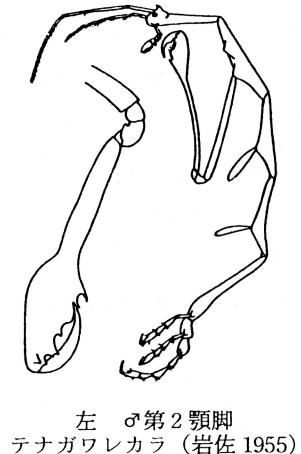
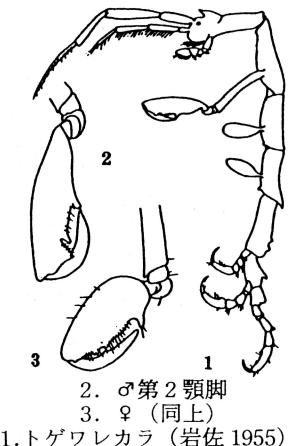


オオワレカラ
(岩佐 1955)

1. *Caprella penantis* LEACH マルエラワレカラ
(変種) 非常に多くの種類(変種)がある。個体変異がいちじるしい。
Caprella neglecta MAYER 第3～第4胸脚がないのが特徴。
C. *verrucosa* (BOECK)
C. *andreae* MAYER ……浮漂性
2. *Caprella scaura* TEMPLETON トゲワレカラ
(変種)
- Caprella typica*; *Caprella diceros*; *Caprella scauroides*;
3. *Caprella gigantochir* MAYER テナガワレカラ
4. *Caprella kroyeri* DE HAAN オオワレカラ(本種)

本種は、幼魚類の重要な
飼料となる。

本種は、寒海性の動物で
あるが、日本各地の沿岸・
浦塩・青島などに分布する。
本県では、たかす海岸など
で採集される。

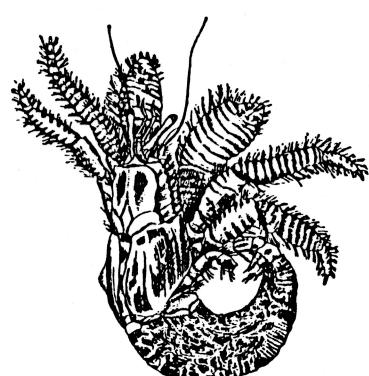


80. オニヤドカリ *Aniculus aniculus* (FABRICIUS 1787)

節足動物 Arthropoda 甲殻綱 Crustacea 十脚目 Decapoda
やどかり科 Diogenidae オニヤドカリ属 *Aniculus* DANA
1852の一種。

ヤドカリの古名、ごうな(がうな 寄居虫)はかうなの変化
したものでその出典については不明。また、ヤドカリの異名、
おばけがい(御化貝)ともいう。

本種は、サザエ *Batillus cornutus* (LIGHTFOOT)の殻など
にはいっている大形(甲長4.5cmぐらい)のヤドカリである。
また、サンゴ礁原のタイドプールでは普通チョウセンサザエ
Marmorostoma argyrostoma (LINNÉ)にはいっているヤド
カリもある。



オニヤドカリ (三宅 1979)

本種の体は、赤茶色～紅白と黄色の長い剛毛が密で、ちょうど横じまをなしている。しまは輪状のものと途中で切れているものとある。甲には、まばらに毛が群れ生じている。鉄脚 cheliped は左右が同大・同形で頑丈である。それは、各節がともに肥厚して、特に長節 meropodite はするどく厚い。そして腕節 carpopodite を屈曲する際に、これを受けいれるほどのくぼみがある。しかし、はさみの部分は短小である。額角 rostrum は大きくてほぼ三角形をして突出している。眼柄 eye stalk は、第1触角柄の長さに等しい。鰓は14対ある。大顎 mandible のひげ（内肢 endopod）は3節よりなり、第2節に膨出突起がある。

腹部は、よく発達してらせん状に巻いていて大きい。そして、赤紫色で、♂の第2～第5腹肢は、内肢が退化して痕跡的である。一方、成熟の♀では、第1～第3腹肢に大きな葉状付属物が発達して抱卵期の保育のうの役目をする。抱卵期は7月頃である。産卵後は、左側腹の肢に卵をつけ、その外側をうすい膜でとりまく。

尾節の前葉は、後葉よりもはるかに大きく、後葉は左右の小葉に分かれる。左葉は右葉よりも大きく、各々の末端には長い剛毛が生えている。

本種は特に警戒心の強い種類で、ものにしがみつく習性がきわめて強い。

本属に含まれる種類は、世界中で5種〔三宅貞祥博士(1982)による〕あって、日本近海では本種のみとなる。

本種は、暖流系の動物で、新潟県・東京湾より南方に分布している。

1.	Aniculus	chiltoni	THOMPSON	1930	ニュージーランド
2.	A.	maximus	EDMONDSON	1952	ハワイ
3.	A.	elegans	STIMPSON	1852	パナマ
4.	A.	longitarsis	STREETS	1871	パナマ
5.	A.	aniculus	(FABRICIUS 1787)	本種	

本県では、高浜海岸などで採集されている。

(つづく)